

資料2：武生時代に齋藤がまなんだこと

1：英文自伝では

- 彼の親族の一人の指導で、中国語学習（漢籍の学習）コースを開始し、それをおよそ7年間続けたが、ほんの薄い10部ほどの中国の古典しか終えることができなかった。
- およそ2年半でエドワードは素晴らしい進歩を見せ、かなり評判の高い書物を500冊読み終え、そのうえ、とても正しい文章、それも詩すら作れるようになっていた。

2：懐旧談では

- 家では祖母に素読と手習いを習い、隣家の当時は御近習役を勤めていた別家齋藤家の主にも習ったと語っている。毎朝、『論語』と『孟子』を持って通ったと。さらに藩中の手習子や本読子を集めて寺子屋を開いていた八木という老先生のところへも行ってたと。
- 祖母の死後、叔父の指導を受ける中では、「毎日作文を勉強し、文を作ること日々に三篇、詩を作ること五首、読書は紙数三寸（紙の厚さで測った）読むという日課だった」と。また「往事二十一史略を三遍繰り返して読んだものは実に齋藤一人であった」（栗塚省吾談）といわれるほど実に勉強したと。

3：「藩校」立教館の教育（「松井耕雪翁伝」昭和9年松井耕雪翁道德顕彰会刊より）

<p>以上句讀師南北局に分れ、素讀生の人數により繰替可也申、右數部之外句讀師之職外可也讀書事。</p> <p>文章師 時刻を限、漢文和俗文とも并に詩賦之類訓正可也致候事。</p> <p>別局 但月毎に三會文章軌範之類講釋も可也然歟。</p> <p>幼儀師 小學齊家寶要等の書を本として、日用進退應對行住坐臥其外共心得方指南可也致候事。</p> <p>別局 九々割聲八算見一等を始、其外書生好に應じ、諸算術秘奥に至る迄望次第之事。</p> <p>算學師 以上</p> <p>翰講廻讀 訓導師之差圖を受、隨宜可也取斗事。</p> <p>文會詩會 文章師之差圖を受、隨宜可也取斗事。</p> <p>策問 但月毎に三則、凡十日毎に一則、答文は漢文和俗文不レ苦候事。</p> <p>詩題 但月次三題。</p>	<p>句讀師 南局 孝經・大學・中庸・論語・孟子・小學 北局 詩・書・易・禮記・春秋左傳</p> <p>訓導師 一員 周易附老子・莊子・列子・管子・墨子等 一員 三禮附文獻通考・文公家禮・小學齊家寶要等 一員 詩經附離騷・文選・唐宋詩醇等 一員 書經・春秋三傳附國語・戰國策・史記・漢書・通鑑・本朝國史等 一員 孝經・大學・論語附中庸・孟子・荀子・家語・孔叢子・文仲子・韓柳文・八大家等 以上</p>	<p>教授職 闕</p> <p>總裁 督學 文武御奉行</p> <p>訓導師 五員 但人數不足之時節は兼役可也相勤事</p> <p>句讀師 八員 但同上</p> <p>文章師 二員 但訓導師之内にて兼役之事</p> <p>幼儀師 二員 但別段御人選に相成候はゞ宜敷不レ得也止事一時は兼役</p> <p>算學師 二員 但別段御立置候事</p> <p>以上</p>
---	--	--

4：松本源太郎が語る「立教館」での学習（『懐旧録』・松本秀彦著『母を語る』1977年私家版）

（慶応3年から明治3・4年までの足かけ4・5年間）

書籍は如何なるものを読みしや。（中略）四書五経もありたらんか。皇朝戰略編、日本外史、十八史略、皇朝略、元明史略等ありしを覚ゆ。全部殆ど漢籍なりしと大部分主として素読なりしは確かなり。習字は無論ありたり。手本はおそらく菱湖なりしなるべし。